

想像してみてください。もしあなたが突然、全く面識もなく言葉も文化も違う人々の中に置かれたら…。同じ国に暮らし同じ言葉話を話していても、お互いを理解するのは難しかったり、時にはすれ違いや争いが起こることもありますね。

共通の価値観や話題を見いだせない、そもそも意思の疎通にも難がある…。そのような環境で、人はどのように感じ、どのように対応するのでしょうか？

1月31日公開のドキュメンタリー映画『バベルの学校』で映し出されるのは、まさにそんな状況なのです。

映画では、20の異なる国籍を持つ24人の子供たちが、馴染みのないフランスの地でひとつのクラスに集められます。彼らは言葉を超え、文化を超え、一人ひとりの価値観の違いを超え、ディスカッションや対話を通じてお互いを知っていきます。

この特別な環境に置かれた子供たちが、時に激しくぶつかり合いながらも徐々に心を通わせる姿から、違いがある“バベル(「混沌」の意)”の状態だからこそ生まれるものがあることや、違いを認め歩み寄ることの大切さ、そして人のコミュニケーションの原点を、この映画は教えてくれます。

監督は『やさしい嘘』(2003)で高い評価を受けたジュリー・ベルトゥチェリ。『バベルの学校』は本国フランスでは多きな反響を呼んだ話題作です。

「バベルの塔」は旧約聖書に出てくる説話で、高い技術を得て神への畏怖を忘れた人間たちを、神は言葉を分かつことで団結できないようにし、コミュニケーションを奪われた民は混乱し、別々に暮らすことを余儀なくされます。

思い上がりによってバベル(混沌)の状態にされてしまったことを反省し、人間の傲慢を諷める訓戒とするのが「バベルの塔」の一般的な理解です。しかし一方で言葉が分かれば、民が世界に散ったことで各々独自の文化が花開き、様々な価値観や風俗、創作などが育まれていったのです。

知識や技術、思想や芸術を抱え込むのではなく、言葉が分かれることによってそれぞれの豊かな文化を広げ、育てることができるようになった、というのがバベルの塔の真の意義なのではないか、と私たちバベル・グループは考えています。

そうして一度離れたことで多様性が生まれた人間の営みを、再び集めて結びつけるための鍵、方法こそが“翻訳”だと私たちは信じているのです。

インターネットが登場しグローバル化が進む中で、互いの理解を促す翻訳の役割はますます大きくなっていますし、異なる文化が出会い、結ばれるチャンスもまた広がっています。

今なお争いが絶えない世の中ですが、私たちが市民としてできることは、まだまだ多いように思われます。